オペラ チューリヒ歌劇場《インテルメッツォ》プレミエ

観客を温かい苦笑へ誘い、最後は一種のあきらめを伴う幸福感に満たしたこのオペラは究極のインテルメッツォ（幕間劇）と言えよう。当時の聴衆を『映画世代』と酷評したリヒャルト・シュトラウスが、この限りなく映画のシーン展開に近い演出を観たらがっかりするかもしれないが、現代人にとってはノスタルジックですらあり、自然に楽しめた。

シュナイダーの指揮はシュトラウスらしさと、このオペラ特有の、端々に仕込まれた雄弁なコミカルさを両立させ、素晴らしく効果的であった。エキストラもすべてがしっかりしたコンセプトの上に作り上げられた舞台装置となり、回り舞台が閉まっている間ですら、「演出上何が起こるのだろう」とワクワクさせられた。

残念なのは主役たちである。年間プログラムではハルテリウスの名があった妻の役をクリスティアーネ・コールが歌ったが、若手なりの健闘は認められるものの、主役を歌う器では、まだない。始終プロンプターをすがるような目つきで見つめる姿は、オペラ全体の格を下げてしまった。夫役のギルフィーは、ドレスリハーサルでは病気をおして歌うというアナウンスがあったが、初日にはなく、どんどんかすれてくる声がついにひっくり返ってしまうハプニングが何度もあり、集中して聴けなかった。柔らかい音色で包容力ある夫を好演していただけに残念だ。唯一安定してオペラを支えていたのは、ロベルト・サッカの男爵だった。22歳の役にはどう見ても無理があるが、歌唱、演技共に、彼なしではこの公演をチューリヒ歌劇場のレヴェルに保てなかったであろう。

もともと満席ではなく、休憩後にはもっと空席が目立ったが、終幕後は皆幸せそうな顔でゆったりと帰途についていたのが印象的であった。

（中 東生）